

保元物語の本文批判の實例について

高 橋 貞 一

一

古典の研究において本文批判の重大なことは今更述べるまでもない。平安文學においては池田龜鑑博士の研究が注目せられるが、鎌倉室町時代の文學は平安文學以上に複雑である。その中でも特に軍記物語は最も本文批判が困難な作品である。今までに多くの研究者が傳本を分類して、その系統を明らかにすべく比較對校したのであるが、その理論的根據を明確にしなかつた憾みがある。その實例を擧げながら本文批判の理論的なものを追求してみようと思ふ。保元物語平治物語より平家物語、太平記に及ぶこととするが、ここには保元物語に先づ觸れてみよう。

本文批判はいふまでもなく（文學）作品の傳達によつて原作品に變化が生じ、その變化した作品を通して原作品に復原するのが目的である。原作品がそのまま傳達された場合は本文批判は殆ど必要がない。それではどんな傳達方法とどんな變化があるか當面の問題である。前者の傳達方法には口承と書寫の二つがある。多くの場合は書寫である。平安文學などでは口承のものは和歌歌謡の方面に限られてゐるといへようか。然し軍記物語には口承即ち語り物としての傳誦が伴つたのである。保元平治物語が平家物語の平家琵琶（平曲）の如く語られたことは既に多く

の人々の認める所である。この二つの傳達方法のあることは、一方では作品の流動を促すと共に變化を複雑にするが、又一方では系統關係を研究するに好都合な關連を示すことも少くない。例へば平家物語の場合の如きは、一流本と八坂流本の流動の間には自然と本文の差異が生れて來て、その變化特質を辿れば自然に本文の系統が分れて來るといった好都合もある。然し作品が作成せられてから長年月の間には、口承も混交し、書寫も相互に影響を與へて、本文の性質を推定するに困難な場合が生ずるのである。そしてそれが單純に或個人によつて變化改訂する場合もあり、又集團によつて改訂される場合もあり一時期の變化改訂でなく、長年月にわたる變化である場合もある。この様な場合には、傳本の性格や意圖を推定することは單純には出來ない。同時的並列的に觀察するといふ條件にすれば可能ではあるが、成立經過を問ふことになればこれはかなり複雑な研究難問である。昭和四十四年三月、小西甚一博士が、「平家物語の原態と過渡形態」と題する論文（國文學漢文學論叢）で、巨視的な洞察をされたことがあるが、やはり實際に平家物語を校合されたことのない人の論は空しい感がするのである。それは何故といへば、實際の例にあたると推定や批判に確乎たる理論がないからである。それで筆者はその原則を幾つか提示しようと思ふ。

第一の原則は、後出の本文は増加する、即ち原作にない詞章が添加することである。保元物語で云へば、杉原本（彰考館文庫藏本）には、保元物語の序文がある。これは流布本の序文と同一である。又同本卷三に無鹽君事があるのもその一である。他に爲朝の鬼島渡り并最後事もその一例である。

第二は特異な詞章を有する傳本は類を構成する。即ち一傳本の特質が他の傳本と共通する場合は他の傳本と同一系統本を示す。例へば金刀比羅神社藏本（岩波古典大系本底本）の詞章の特質は、學習院大學藏本（九條家舊藏本）と

同一系統本であることが認められる。そして次に類と類の前後を明らかにすべきである。第三は口承の場合、記事の繁簡、叙述の順序に變化のあることがある。それが傳本に影響を與へて、口承そのものではないが、記事の繁簡、叙述の順序の變化をもたらず。單なる書寫では成立しない本文の差異がこれである。例へば、保元物語で云へば、京都大學史學研究室藏本、康豐本（彰考館文庫藏）についてみるに、近衛院崩御事の次に、康豐本には、
成時の終りに崩御成にけり。今の近衛院と申也。御年十七、誠に惜かるべし。

法皇も女院も共にさしもいとおしく悲しき御事にて、朝夕は千秋万歳とこそ祈申させ御座しに、さこそあやなう思召れけめ。誠に有待の身は高下異なる事なく、無常の境は、刹利も首陀も簡ず、されば妙覺の如來既因果の理を示し、大智の舍利弗、猶宿世の業を感じけり。老少不定の世、始て驚くべきにあらねども、時に取て淺猿かりし事也。法皇は早晚雲の上の移かはる有様を御覽するに、權現の御託宣思召合られて萬物うくおぼし埋れて、供御もはかしくまいらず、常は夜のをとゞにぞ入せ御座す。角て今年は暮ぬ。次の年の四月に改元有しは、保元々年と申す。春の比より又法皇御惱と聞えき。これは偏に去年の秋近衛院の御先立せ御座いし御歎の積りにやとぞ見えし。

依之同六月十一日美福門の女院成菩提院の御所にして御飭をろさせ御座す。先帝も隠させまします。法皇の御惱をもをこたらせ給ざりけるに依て、御歎の餘に思召立とぞ聞えし。御戒師には三嶽の觀空上人ぞ參られけり。

とある。この文中、傍線を付したる所は、金刀比羅神社藏本、同系統本、及び半井本などは法皇崩御事の後の文である。この様に康豐本には記事の順序の甚しく異なる本文が存在する。これを京都大學史學研究室藏本をみるにも、今の近衛院と申は是也。御とし十七歳おしかるべき御事ぞかし。

法皇はさしもいとをしくかなしき御事におもひまいらせ給ひしかば、朝夕は千秋万歳とこそいのり申させ給しに、さこそあへなくおぼしけめ。まことに有待の御身は高下ことなる事なく、無常のさかひには、刹利も須陀もきらず、妙覺の如來因果のことりをしめし、大智の舍利弗も宿世の業をかんず、世間の無常いまにはじめぬ事なれども、時にとてはあさましかりし事也。

法皇は雲の上のうつり行ありさまを御覽するにも、權現の御たくせん有し御事おぼしめして、くごもはか／＼しくもまいらず、つねは夜のおと／＼へのみいらせまし／＼けり。かくて今年はくれぬ。次年改元ありて保元元年と申し春の比より、又法皇御悩ましますときこえければ、去年近衛院のかくれさせ給ひし御歎のゆへにやとぞ申ける。一かたならぬ御歎なりしかば、六月十一日、美福門院は鳥羽の淨菩提院御所にて、御ぐしをろさせ給けり。御戒師には、みたけの觀空上人ぞまいられける。

この順序の甚しく異なる本文の成立を如何に説明するか。これは口承による改訂とみるか、後人の改作作爲と認めるか、いづれにせよ、多くの傳本とは異なる點において注目すべく、又康豐本と京都大學史學研究室藏本との關係が極めて密接であることを示すものである。この點は康豐本が前出である例が多いが省略する。平家物語においては、傳本が多く本文の變化は多種多様であつて、十分に比較検討することは個人の研究としては限度があると思はれる。今までに發表した佛教大學、人文學論集所收の拙稿を参照されたい。

第四は、卷頭より卷末に至る作品全體の詞章を對象として考察すべきであつて、一部のみを以て作品全體（全詞章）を推定してはならない。平家物語の場合などに、一部をあげて都合のよい結論を出してゐる研究報告が多いが、系統論なり、一つの結論がすべての詞章又は作品全體に適應されるものでなければならぬ。

第五は、現存の傳本を根據として、假空の傳本を設定することは嚴に慎しむべきことである。原作品を想定することが本文批判の目的であつても、現存傳本を越えることは構成、表現論と相まって、作品の成立する以前の狀態を分析する原據論（動機論）、資料などと區別がつかなくなる恐れがある。平家物語の研究で原平家といふ語を用ひる研究者があるが、その原平家の性格を如何なるものかといふ規定をしないのでは、空虚になつて單なる想像に終るのである。

第六は、人間の努力で變化が生じたのである。人間の力では到底出來さうもない様な變異は論外である。一傳本と一傳本との差が極めて大きい場合は、系統論は成立しない。二傳本が本文批判に堪へるには同一作品であるといふ限度を越えないことである。例へば平家物語と源平盛衰記を比較して、これを同一平家物語とすべきでなく、又同一系統本と認むべきものでもない。これを讀み本、語り本として區別する場合もあるが、それも餘り重要な意味を示すものでもない。

以上の幾つかの原則を基礎として保元物語の本文批判の實例を行つてみたい。

從來の本文批判、系統論から云へば、筆者の前にも、高木武博士の研究などがあるが、筆者の研究（平家物語諸本の研究附載、昭和十八年刊）と、昭和三十六年刊の岩波古典大系保元物語の解説との間には甚しい差異がある。筆者の研究は、保元物語の傳本を甲・乙・丙の三類に大別し、甲類本は原作品に近い傳本とし、乙類本はこれを基として、改訂増補したもの、丙類本は流布本としたのである。甲類本の代表としては金刀比羅神社藏本をあげたのである。乙類本としては、代表として舊本保元物語（松井博士舊藏、靜嘉堂文庫現藏）をはじめ、半井本（文保二年八月三日書寫・彰考館文庫藏）、杉原本（彰考館文庫藏）などをあげたのであつた。これに對して、永積安明博士は、

第一類 文保、半井本系統の諸本

第二類 鎌倉本（康豐本）

第三類 京圖本系統の諸本

第四類 金刀本系統の諸本

第五類 京師本の系統の諸本

第六類 正木本系統の諸本

第七類 杉原本

第八類 流布本系統の諸本

とし、出現の順序も、第一より第三類までが第四類の金刀本系統の諸本より前出したのである。これに對して以後多くの研究者がこれに追隨したことは誠に遺憾である。それは以後の人が果して諸本を對校したのであらうかという筆者の疑問がある。永積博士と筆者との見解の相違であるといつてはすまされない重要な問題である。それで、半井本と金比羅神社藏本とを比較して、半井本が先出であるといふ證據を詞章の上で證明しなければならぬ。筆者が「保元物語（半井本）と研究」（未刊國文資料、昭和三十四年五月刊）でその一部を示したのであるが、半井本文保本が成立するに至るまでには、長い期間に本文上の變化が行はれ來たと認められるのである。半井本の本文と流布本との間には極めて密接な關係があるのに、同一の記事において、金刀比羅神社藏本には全く關係がないのはどういふわけであるのか、本文流傳の上で説明が難しいのである（本文が別の作品としては考へられない制限がある）。左にその一節を示すと、例へば近衛天皇崩御事には、

金刀比羅神社本

帝もことなる御咎もわたらせ給はねども、御位を下しまいらせ給けり。是當腹御寵愛によりて也。同年七月十日上皇鳥羽殿にして御ぐしおろさせ給ふ。御年卅九。御よはひもまだおとろえさせおはしまさず、玉躰も御つゝがもましまさゞれども、宿善内にもよほしければ、善縁外にあらはれて、眞實報恩の道に入せ給ふ。

かくて年月をふる程に、久壽二年の春のころより、主上不豫に入せ給ふ。是によりて、内外の御祈さまぐゝなりといへども御しるしもみえさせ給はず、春すぎ夏たけ、秋も漸ふふけゆけば、彌所せきさまにみえさせまします間、禁中にも仙洞にも何事の御さたにも及ばず、八月十五日にも成ぬ。今日は駒引として左馬寮の使國々の御牧の駒をたてまつる。官使あふさかの關に行向て是を請取る。その儀式年にかは

保元物語の本文批判の實例について

半井本（内閣文庫藏本）

^A先帝コトナル御ツ、カモ渡ラセ給ハヌニ、ヨシヨロシ奉ラセ給フコソ、淺増ケレ。

^Bカ、リケレハ、御恨ノミ殘ケルニヤ、一院父子御中不快ト聞エシ、誠ニ心ナラス御位ヲサラセ給シカハ、ナヲ返シツクヘキ御志モヤマシ〜ケン、又新院ノ一宮重仁親王ヲ位ニ付奉ラセ給ハントヲホシメシケルニヤ、御心中難知、^C永治元年七月十日、一院御クシヨロサセ給ヒケリ。御年卅九、御齡未衰給、玉躰モツ、カ御座サネ共宿善内ニ催シ、善縁ホカニアラハレケレハ眞實報恩ノ道ニ入セ給ソ目出キ。

^D久壽二年七月廿三日、ハカラサルニ近衛院カクレサセ給ヌ、御歳十七歳、惜カルヘキ事也、^E法皇女院ハ御歎ナハメナラス、申モ愚ナリ。新院此ヨリヲエテ、我身コソ位ニ不取付トモ、重仁親王ハ今度ハ位ニハ遁シ物ヲト待ウケサセ給ケリ。天下諸人モカク思ケ

る事はなけれども、今年は御惱によりて止めらる。
男山の放生會は、恒例嚴重の神事なればとてかたの
ごとくとげ行はれけり。

内裏には南殿の翠簾もあげられず、詩人歌仙も參ら
れず、萬物すさまじきやうにみえさせ給しが（中略）
虫の音のよはるのみかは過る秋をおしむわが身ぞ
まづ消えぬべき

人々是を拝したてまつり、且は感じ、且はいまゝ
しくもおぼゆるほどに、あくる十六日御なふおもら
せ給ふによりて、俄に御位をすべらせましますと聞
えしが、その夜のいぬの尅ばかりに、終にかくれさ
せ給ひけり。桃顔いまだ春の霞におとろへさせまし
まさゝれども、蘭質たちまちに秋の霧にをかされて、
あしたの露と消させ給ぬ。御年わずか十七歳おもひ
あへざりし御事也。

右の本文を比較する時、半井本の本文をABCDEの五分節に分けると、ACは略金刀比羅神社藏本と同類の本
文であるが、BEは金刀比羅神社藏本には全くなく、Dは極めて簡略である。この本文の成立を金刀比羅神社藏本

ル所ニ、ヨモヒノ外ナル美福門院ノ御計テ、後白河
院ノ四宮トテウチコメラレテ渡ラセ給シヲ位ニ付奉
セ給。高モ賤モ誠ノヲヤナラヌ御隔ニテ、女院角被
思食ケル。新院トハ一ツノ御腹ニテワタラセ給ヒシ
カトモ、女院モテナシ奉リ、法皇ニモ内々コシラヘ
申サセ給ケルトソウケ給ル。是ニヨリ新院御恨今一
入ソマサラセ給ソ理ナル。

より先とすれば、金刀比羅神社藏本は、BEの本文を省略し、Dを甚しく潤色しなければならない。果してこの様な事が簡單に行はれるであらうか。この所を流布本（慶長平假名古活字本）について見るに、

先帝、ことなる御つゝがもわたらせ給はぬに、をしおろし給ひけるこそあさましけれ。

よて一院新院父子の御中、心よからずとぞきこえし。誠に御心ならず御位をさらせ給へり。返りつかせ給べき御志にや、又一の宮重仁親王を位につけ奉らんとやおぼしけん、叡慮はかりがたし。

永治元年七月十日、鳥羽院御かざりおろさせ給ふ。御歳三十九、御よはひも未さかりに、玉躰もつゝがなくおはしませども、宿善内にもよほし善縁外にあらはれて、眞實報恩の道にいらせ給ぞめでたき。

しかるに久壽二年の夏の比より、近衛院御惱ましまししが、七月下旬には、はやたのみすくなき御事にて、すでに清涼殿のおひさしの間にうつし奉る。されば御心ほそくやぼしめしけん、御製にかく、

虫のねのよはるのみかはすぐる秋を惜しむ我身ぞまづきえぬべき

終に七月廿三日に隠させ給ふ。御歳十七、近衛院是也。尤惜き御齡なり。法皇女院の御なげき、ことはりにも過たり。

新院此時を得て、我身こそ位にかへりつかずとも、重仁親王は、一定今度は位につかせ給はんと、待うけさせおはしませり。天下の諸人も皆かく存じける處に、思ひの外に美福門院の御からひて、後白河院、其時は四宮とて、打こめられておはせしを、御位につけ奉り給ひしかば、たかきもいやしきも、思ひの外の事に思ひけり。此四宮も、故待賢門院の御腹にて、新院と御一腹なれば、女院の御爲にはともに御繼子なれども、美福門院の御心には、重仁親王の位につかせ給はんことを、なをそねみ奉らせ給て、此宮を女院もてなしまいらせ給て、法皇にも内々

申させ給ける也。其故は、近衛院世をはやうせさせ給事は、新院呪明奉給となんおぼしめしけり。是によて新院の御うらみ、一しほまさらせ給も理り也。

流布本の本文を a b c d e に分割すれば、a b c は殆ど半井本と同じく、d がやや異なるが、e も殆ど同文である。然るに e の中、傍線を付した所が後の増補と推定せられよう。とすれば、半井本と流布本との關係は明確に、半井本が前出で、これを基として流布本が成立したと認めてよいであらう。この現象はその他の記事に於いても多くの例をあげることが可能である。次に金刀比羅神社藏本との關係をみれば、流布本は d の所に、「虫のねの」歌が入つてゐる。これは他の傳本によつたもので、金刀比羅神社本と共通の性格を僅に持つに過ぎない。金刀比羅神社藏本にある近衛院崩御に關する詳細な記述は、半井本や流布本には見ることが出来ない。ここにこの記事をめぐつて金刀比羅神社藏本が前出か、半井本が前出かといふ判斷が要求せられる。が他の傳本に、半井本の如き簡略なる傳本が存しないので、半井本成立に至る經過を明證することが出来ない。この近衛院崩御事はこれ以上追及が出来ない。次に然らば金刀比羅神社藏本と半井本との前後を決定するには何處を比較すべきであるかといふ問題が生れて來よう。軍記物語の異本は多種多數である。それ故に、中間的な傳本の流動を把握するのが次の方法である。これに就いて康豐本（彰考館文庫藏）をとりあげてみよう。康豐本の下巻、爲義北方事を示すと、

金刀羅神社本

嵯峨太秦に参りて様をかへんと思へども、爲義が妻の身のよくて惡てなんど、法師原の沙汰せむ事も心

康 豐 本

嵯峨うづまきに詣つゝと思へば、爲義朝臣が妻の有様、など沙汰せられむも口惜し、親しからむ僧に判

うしとて、與かきが刀を乞て、自髮を切落し、あまたにゆひわけ、佛神三寶に手向奉り、石をつゝみ具して、河の中へ入られけり。人一日一夜を経るに、八億四千の思有と、佛の説せ給へるを、何事にかしまではと思ひけるこそをろかなれ。我身の歎を數へんには、河原の石は崩共、猶いか計かは積まし。判官殿は六十三、七八十迄有人も有ぞかし。思へば惜き齡也。況子共の行末は、未遙なるほどぞかし。浮世につれなくながらへば、子共の年數へても、今年はそのはいくつくと、子共に似たる人をみて、あらましかばと戀しくば、切けんものゝ恨しき、切るゝ子共の痛はしき、思つゞけて一時も世に有べしとも覺ず。心に任ぬ世間の習なれば、一日片時もつれなく命ながらへて、つもらん罪こそ怖しけれ。さらば水の底へも入なばやと思ふぞとよ。此身の命を惜ず、只無上道を願ふべしとぞ佛も説せ給ふなれな(とみ)んど打くどき、泣々の給ひて、とにも與に乗給はず。

保元物語の本文批判の實例について

せ、ば、や、と、お、も、へ、共、今、は、叶、ま、じ、其、迄、も、心、元、な、し、とて、刀、こ、い、寄、て、自、も、と、結、き、は、よ、り、か、い、切、あ、ま、たに、結、分、て、佛、神、に、廻、向、し、て、石、に、懸、具、し、て、河、の、底、に、沈、て、け、り。其、後、又、か、き、く、ど、き、申、け、る、は、夫、人、一、日、一、夜、を、ふ、る、に、八、億、四、千、の、念、あ、り、と、聞、く、何、事、を、か、は、と、思、だ、に、も、角、こ、そ、は、あ、む、な、れ。況、童、は、が、命、の、限、は、此、事、を、忘、し、共、覺、ぬ、ぞ。七、八、十、迄、も、存、命、る、人、も、有、ぞ、か、し。判、官、殿、こ、と、し、は、六、十、三、に、成、つ、れ、ば、人、害、さ、ず、は、ま、だ、も、有、な、ま、し、共、思、ぬ、べ、し。何、況、子、共、の、年、を、數、へ、て、は、今、年、は、其、は、い、く、つ、つ、に、な、ら、ま、し、物、を、と、思、出、て、は、害、け、む、人、も、浦、め、し、く、て、縦、經、を、讀、佛、を、念、ず、と、も、其、功、可、有、共、覺、ず、去、共、彌、罪、の、積、ざ、ら、む、前、に、水、の、底、へ、も、身、を、投、て、此、者、な、ど、も、同、道、に、も、行、む、事、も、が、な、と、こ、そ、思、へ。

めのとの女房を初て、口々に申けるは、ひとかたならぬ御歎、さこそは思召らめども、古より今にいたるまで、男にをくれ子に別るゝ習、誠多しといへども、忽に命を捨る事、惣じて例なき事にこそ。

昔は胡塞萬里の雲路に鏡の影をかこちわび、燕子樓の霜月に夜々心を傷しむ。人間有爲の習、愛別離苦、

前後相違の理は、御身にかぎらぬ事共也。今度の合戦にも、平右馬助入道の女房は、父子五人にをくれ給ひ、左衛門太夫殿の北方は、親子四人に別給ふ。

され共身を抛命を捨事はなし。皆様をかへ姿をやつし給ふ也。又同道にこそと思召共、冥途へ趣ぬる者二度行逢事候はざる也。六道四生區々別て、何の道にか向せ給はんずらむ。其よりも只疾々御宿所へ歸らせ給て、面々の御孝養をも營せ給へし。水の底へと思召入なば、御身の罪障の深くおはしまさむのみならず、入道殿、少き人々の御菩提をば誰かは訪奉べきなど様々に慰め申て、各河の端に打双てめをも

共者口々に慰ければ、恩愛の別、實にさこそは思食れ候らめ、乍去昔も今も子に後夫に後るゝ様候なむや。

當時も左大臣殿の御臺盤所も様を替させ給たれども、御身を投られたとは聞ず。平右馬助入道殿の北方も父子五人に後給たれ共、身をば投給ず。左衛門太夫殿の北方も、父子四人に別給へ共、其儀候はず。去ば御身一人の事に思召べきに候はず。又同道にと思食、實に御理にて候へ共、冥途へ赴候者に必しも行合候はざん也。六道四生區に別て候へば、何の道にか趣給けん、知難し。其よりは只疾々御宿所へ歸て御菩提を訪申させ給へ。そののみぞ互の御功德にて候べき。此御計は公達の御爲還て罪深き御事也とて、各河の端に立並て目を放たざりければ、實に行

放ち奉ず。女房うちうなづきて、我身を捨てたり共、後の世迄行逢事のなからむには何かはせむ。さらば京へ歸るにてこそあらめとて、輿にのらんと立よらせ給へば、心安て立のき、河を渡らんとする紛れに、走違て、岸より河へ飛入給ふ。

合事のなからむには身を捨てても何かはせむ、さば京へ歸にてこそあらめとて、輿の許へ立寄りければ、各心安く立のきたりけるまぎれに走ちがひて岸より川へで飛入ぬ。

兩方の本文をよく比較するに、金刀比羅神社藏本の傍線を付した處は、康豊本になく、康豊本の傍線を付した所は金刀比羅神社藏本と異なる所である。この二つの本文は、單なる書寫によつては何れが前出になるにせよ、到底成立するものではない。文章の表現から云へば、金刀比羅神社藏本の漢語の潤色は極めて特異なもので、他の記事の詞章表現と同じく文學的な高度な潤色である。これを後に増補したるものと推察するのは他の記事の例に徴するならば不自然といふべきである。この記事を半井本についてみると、

嵯峨法輪仁和寺大原ノ方ニ行テ、様ヲ替バヤト思ヘ共、是コソ誰ガ妻ニテ有ゾ、タガ娘ゾト尋ニ、有ハハ、ニ云ズ、ハ、叶ジト云ナラバ、サラバト思テ名乗ナラバ、爲義法師ガ妻ニテ有ケルナ、ミメノ能サ、惡サヨ、髪ノ長テ短テ、齡ハ、イクツゾ、今ハ、イカ程ニハナルラント汰沙セラレン事コソ恥シケレ。我等ヲ知タランアタリノ僧ニ申テ刺セント思也。其程マデモ只有バ人ノ思ハン事モ恥シケレバトテ、刀ヲ乞、本結キワヨリ手ヅカラ押切テ、皆分テ佛神ニ回向シテ石ヲ擧ミ具シテ桂川ニゾ沈メタル。泣々申ケルハ、人一日一夜ヲ歷ルニ、八億四千ノ思有トゾ被説タル、何事ヲカ思ベキナレ共、是程思ハ多カン也、増テ我命ノ有ラン限ハ此事共忘ルベシ共覺ズ、七八十マデ有ル人モ有ゾカシ。入道殿思バ六十三ニ成給ツレバ、殺サズハマダ有増シ物ヲト思ハレ、又子共ノ歳ヲカゾエ

ンニモ、今年ハ其ハイクツニ成ラマシ物ヲト思ハミ、切ケンモノ口惜ク、切セケル人ノ浦目數ノミ有シズレバ、世ニ有ランヲ見ニ付テモ、我子共ノ成ケン様ニ成行カントノミ思ハンスレバ、罪ノミ積リテ、經ヲ讀ミ念佛ヲ申共、其功德有ベシ共覺ズ、只身ヲ投ト思也ト申サレケリ。伴ニハ女房三人ハシタ物、三人、郎等五人、力者十二人、中間七八人有ケルカ、口々ニ申ケルハ、御敷事ハ中々申ニ不及、昔モ今モ加様ノ事ハ候。親ニ追レ子ニ追レ、妻夫ニ別ル、事人毎ノ習也。其ニ身ヲ投死ナンニハ人胤候ナンヤ。今度ノ軍ニモ、左大臣殿ノ御臺盤所モ、御様ヲ替サセ給タレ共、御身ハ投サセ給ハズ、其外或ハ生別レ或ハ死シテ別レヌ。又平右馬助入道忠正ノ北ノ方、親子五人ニ別レテ様ヲ替テ御身ヲ投給ズ、左衛門大夫入道家弘ノ北方モ父子四人ニ追テモ身モ投ズ。皆様ヲコソ替テ候ヘト申バ、人ノ更ネバ我モ更ジト思ベカラズ、心々ノ事ヲヤトテ、薄衣ノ袖ニタマタスキ上テ石ヲ拾テ懷ニ入レ、西ニ向テ南無西方極樂教主、阿彌陀如來、願ハ入道并ニ四人ノ子共、我伴ニ一ツ蓮ニ迎ヘ給ヘト拜ツ、川ヘ入ラントスレバ、御伴ノ男モ女モ川ノハタニ并居テ垣ヲ成シタル様ニ落シ入ジト禦ギケレバ、命ハ惜カリケルゾヤ、死ナントスルニハ死レヌゾ。六條ヘ返テ、幼者共カ云置事モヤ有ケルト尋モ聞ナン。又モ弄ブ物モ取散テモヤ置タルト見ユル也。後世ヲモ訪ハントテ、與ノ方ヘ歩行バ、尤モサコソ候ケレトテ、伴ノ者共悅テ川端ヲ去テ與ノ方ヘ歩バ、走歸テ禦グ者無シカバ、聽テ川ニゾ沈ミ給ケル。

右の文の傍線のある所は、康豊本と類する所である。金刀比羅神社藏本と康豊本との差も極めて大であり、康豊本と半井本との差も又甚だしいが、右の三つの本文をよく比較してもらひたい。半井本の中に、康豊本と類する詞章のあることは看過することができない。この變化を金刀比羅神社藏本↓康豊本↓半井本の順に推測すればやや自然の流動と認められようが、その順を半井本↓康豊本↓金刀比羅神社藏本の如くに説く永積博士はどの様にしてこの

本文變化を説明出来るであらうか。又、半井本の本文に傍點を付いた所は、金刀比羅神社藏本にもなく、又、康豐本にもないもので、半井本の添加した詞章である。第一の原則によつても後出と認めるのが自然ではなからうか。

次に康豐本（彰考館文庫蔵）と京都大學史學研究室藏本とを比較すると前述の如く極めて近似した箇所や性質があつて、康豐本がより多く金刀比羅神社藏本に近いので、康豐本より史學研究室藏本への流動が豫想せられる。しかるに京都大學史學研究室藏本と半井本を比較すると、又近似する所が少くない。

例へば卷上、將軍塚鳴動事を見るに、

京都大學史學研究室藏本

伊勢大神宮は百王をまもらんといふ御ちかひふかし
とこそ承候に、いま廿六代をのこして、當今の御世
に、王法のつきぬる事のかなしさよ。つら／＼事の
心を案するに、我朝は是神國也。御裳濯河の流久し
くして、七十四代のあまつひつぎもたゆる事なし。
昔崇神天皇の御宇、あまつやしろ、國津やしろを
定置給しよりこのかた、神わざ事しげくして、夜ひ
るのまもり、なじかはおこたり給ふべき。推古天皇
御宇、上宮太子代に出て、守屋が邪見をたひらげ、
四天王寺を建立して、勝鬘法花の二經を講じ給ひし

保元物語の本文批判の實例について

半井本

伊勢大神宮ハ百王ヲ護ラントコソ御誓アリケレ。今
廿六代ヲ殘シテ、當今ノ御時、王法ツキナン事コソ
悲ケレ。但シ情事ノ情ヲ案ズルニ、我國ハ神國也。
御裳濯河ノ御流久シテ、七十四代ノアマツ日次モ他
事ナシ。昔崇神天皇ノ御時、天ツ社クニツ社ヲ定置
給テヨリ以來、神ワザ事繁クシテ、國ノ井トナミ、
只此事ノミアリ、是ヲ思ヘバ、夜ノ守リ晝ノ守リ、
ナジカハヲコタリ給ベキ。是ノミナラズ、推古天皇
ノ御時、上宮太子世ニ出給テ、守屋ノ逆臣ヲ誅シテ、
佛法ヲ弘メ給シ故ニ、佛ヲアガメ經ヲ敬事、昔ヨリ

シテ今ニ絶ヘズ。

より以降、佛法繁昌して王法を守事年久し。行基菩薩は泉州大島郡にたゝして寺を四十九ヶ所に立、國分寺を六十余洲にわかち給ひ、傳教大師は江州比叡山の峯をしめて一乗の法雨を普天にあふぎ、弘法大師は紀州高野山の峯をしめて、三密の法水を四海にそゝぎ給き。それより以降、南都七大寺、北京の六勝寺をはじめとして、近ハ畿内、遠ハ七道にいたるまで神社佛寺いらかをならべ軒をきしれり。是則佛法興隆鎮護國家のはかり事なるべし。中にも白河鳥羽兩院は専神祇をやまひ、佛法に歸します。されば國郡半ば神鎮たり。田園悉く佛性によす。然者木のもとかやのもと、いづれの所、和光垂跡の居にあらざる、東西南北、いづれの國か佛道修行の地にあらざる、彼十六國の大國にも過、五百の中國にもこえたり。

中ニモ白川鳥羽兩院ノ御代ニ、專致神祇、深歸佛法ニシテ、國郡半バ神戶タリ田園悉佛聖ニヨス。

十六ノ大國ニモスギ、五百ノ中國ニモ超タリ。

とあつて、京都大學史學研究室藏本は、金刀比羅神社藏本に近く、半井本は後半が簡略であるが、史學研究室藏本は金刀比羅神社藏本が少しく流動し、それに半井本が類似し、且つ簡略であるということである。

傍線を付した如く一部は半井本が金刀比羅神社藏本に近い所もあるが、これは他本の影響とも考へられるものである。次に卷中、關白殿本官に歸復し給ふ事の條を見るに、

京都大學史學研究室本

宇治入道相國は、新院の御方のいくさ破れぬと聞えしかば、左府の公達四人、左大將兼長、中納言中將師長、左中將隆長、大法師範長禪師、此人々相具し奉りて、宇治橋を引て、南都へ趣給ひけり。興福寺の權別當忠信法印と申は、關白殿の御子なり。祖父の入道奈良へ入らせ給ときこえければ、あしかりなるとて、是は京へ御登有りけり。

入道殿は、南都にて禪定院の僧都信(範)、東北院律師智覺、興福寺の上座信實玄實、これらをめされ仰られけるは、寺中の惡僧をかたらひ、きんごくの兵共を招よせて、我をたすけなんやと仰られければ、各心をひとつにして、寺のあくそう、きんごくの兵共をかたらひて、入道殿を守護し奉る。是をきく人申けるは、是いかなる御企ぞや、此入道殿をば、君

保元物語の本文批判の實例について

半井本

宇治入道大相國ハ院ノ御方ノ軍破ヌト聞給テ、アワテ騒テ、宇治川橋ヲ引テ、左府公達三人、右大將兼長、中納言師長、左中將隆長引具シ奉テ、南都へ趣セ給ヌ。關白殿御子、興福寺權別當法師覺繼ヲ、祖父富家殿ノ打奉ラントセサセ給ヘバ、逃ゲテ京ヘゾ上リ給。

入道殿、南都ヲ打塞テ、禪定院ノ僧都尋範、東北院ノ律師千覺、興福寺ノ上座信實、同權寺主玄實、カレラガ舍弟加賀冠者源賴範等ヲ召テ、汝等寺中ノ惡僧ヲ召集、近國ノ兵ヲ駈テ、我ヲ扶奉レ。特忠有ン者ニハ不次ノ賞ヲ可行ト被仰ケレバ、此事心ヲ勵シテ、兵共ヲ駈集メ守護シ奉ル。

是ヲ見テ人申ケルハ、是ハ抑何ナル御計ゾヤ、此入

もはち思召、世にをもうし奉に、法性寺殿のしかるべきかちやくにてをはします、ぜうろくにては左大臣殿をひきたて參らせんと、關白に付たりし宇治のちやうじやに左大臣殿をなし奉り給しをば、哀御ひがごとかたと世には誹り申しかども、天子にも人臣もあひしとならせ給ふうへは、ちからをよばぬことなれば……。

とあつて、兩本の詞章の類似は否定出來ないのである。傍線を付した所は半井本の増訂と認むべく、半井本を後出と認むべきである。かくの如き現象を確認するならば、金刀比羅神社藏本と半井本とを比較しようとしたのが無理であつて、京都大學史學研究室本と半井本とを比較すべきであつたのである。即ち次の關係が推定せられる。金刀比羅神社藏本↓康豐本↓京都大學史學研究室本↓半井本↓流布本とすべきである。これで半井本の出現の位置が略認定せられるのである。京都大學史學研究室藏本と半井本の關係は極めて推定し難い點が多いが、一部にかやうな點のあることは看過できないのである。

半井本の後出に關しては、卷下の蓮如西行に就いても好例をみるのであるが、これは佛教大學人文學論集第八號（昭和四十九年）に、「西行の白峯詣をめぐる」と題して少しく示したのでここにはあげない。卷下の最後の爲朝の鬼島渡り及び最後をあげて考へよう。この記事も、金刀比羅神社藏本などには存しない。半井本には、

西行法師讃岐へ渡りタリケルモ、國府ノ御前ニ參テカクゾ讀タリケル、

道ヲハ君モ聆奉り、世ニモ重キ事ニシ奉ツルニ、法性寺殿ハ可然家嫡ニテ、攝録ヲ請取テ御座ツルヲ差置奉テ左府ハ末ノ御子ニテ御座ツルヲ引立奉テ、關白ニ付タル内覽、氏ノ長者ヲ剗着セ奉ツル事ヲバ、世以テ傾申。
然共天子ニモ人臣ニモ愛子ニ成ヌル上ハ、子細ニ不
及事ナレバ……。

松山ノ浪ニナガレテコシ船ノヤガテ空ク成ニケル哉　白峯ノ御墓ニ參テ、ツク／＼ト候、泣々カウゾ仕リケル。
ヨシヤ君昔ノ玉ノユカトテモカ、ラン後ハ何ニカハセン　怨靈モ靜リ給フラントゾ聞シ。

爲朝ハ保元ノ亂ニ左右ノカ井ナヲ拔テ、伊豆ノ大嶋ニ被流タリシガ、自然ニカキナ愈付テ、弓ヲ引ニ昔ノ弓ノ力程ハ無レ共、極テ能成タリケルガ、カキナガイトゞ長ク成テ、本ノニ二伏セ延タリケルニ依テ、弓ノ力ハ劣リタレ共、矢柄ガ延タリケレバ、物ヲ通事昔ニハ増リニケリト申ケル。哀レ安ヌ物哉、朝敵ヲ責テ、將軍ノ宣旨ヲ蒙リ、國ヲモ庄ヲモ給ハルベキニ、イツモ朝敵ト成テ流レタルコソ口惜シケレ。今者此嶋コソ爲朝ガ所領ナレトテ、伊豆ノ大嶋、ミヤケ嶋、カツウ嶋、八丈ガ嶋、ミツケノ嶋、ヨキノ小嶋、ニイ嶋、ミ倉嶋、此七ノ嶋ヲゾ領シタル。此七ノ嶋ハ宮藤齋茂光ガ所領也、一所モ主ニハ不能押領ス。茂光ガ代官ニ嶋ノ三郎大夫、茂光ニネメラレテ恐レツ、嶋ノ年貢ヲ伊豆ヘゾ乞タリケル。賀ノ爲朝ハ是ヲ聞テ、舅ヲ擲テ右指ヲ五ナガラ切落ス。其ヲ始トシテ、嶋々ニ弓矢取テ能カラン者ハ、皆爲朝ガ敵也トテ、カイナヲ打、肘ヲ折バ、其罪ヲ免レムガ爲ニ、命ヲ失ハムヨリハ弓矢ヲ捨トテ、嶋中ノ弓矢共、各嶋ニ集テ皆焼失、爲朝ガ弓矢計ゾ残ケリ。

爲朝ハ丈カ嶋ニテ、アケボノニ見バ、青鷺白鷺ニツレテ、東ヲ指テ飛ヲ見テ、八郎申ケルハ、是ヨリ奥ニモ嶋ノ有バコソ鷺ハ行ラメ、鷺ナンド一羽ニ二千里ニスギテハ飛ザム也。サギハ遙ニ小サケレバ、一二百里ニハヨモスギシ。イザキテ見トテ、俄ニ船ニ乗テ鷺ガ飛方ヘコガスレバ、順風出來テ、一日一夜走タレバ、知ヌ嶋ニゾ付ニケル。荒磯ニテ白浪折懸テ船ヲ可寄所ゾ無キ。サレ共嶋ヲコギマワシテ見バ、乾ノ方ヘ小川ゾ流レタル。爰ニ舟ヲ付タリケル。其島ノ人ノ形チ、長ケ一丈餘ナルガ皆大童也。刀ヲバ右ノ脇ニゾ指タリケル。云事モ聞知ズ、サレ共□ニ心得テアヒシラウ。イツクノ物ゾト問バ、日本ノ者ト答タリ。態ト渡リタルカ、風ニ被放タルカト尋ヌ。態ト

コソ渡タレト申タルニ、此嶋有ト他國ニ知タラバコソ態トハ渡ラメ、昔ヨリ此嶋ニ風ニ被放チ寄タル者ノ、ヲノ
 レラガ國へ歸事無。其故者寄所ノ荒磯ナレバ、皆クダケテ失ヌ。此嶋ニ船無レバ、送事モセズ。汝等ガ食物是ニ
 無。是ニ依テ此嶋ニテ疾死タル也。持所ノ食物ツキヌ前ニ疾々歸ト云。爲朝、是ヲ聞テ、嶋ニ上テ見バ、田モ畠
 モ無、樹木ノ實モ、我國ニ食樣ナル物無リケリ。汝等ハ何ヲ食テアルゾト云ヘバ、魚鳥等ヲ食也ト申バ、イカ、
 シテ取ゾ。釣スル船モ無。網引所モ無。我等ガ可然食ニテ、ナギサニ寄ル也ト云ケレバ、爲朝岩ノハザマヲ見廻
 リミレバ、大ナル魚共浪ニ打レテ、イクラトモ不知寄臥セリ。是ヲ取テ氣味ヲ調ルニ不及、皆焼テ破食フ。鳥ヲ
 バイカニシテ取ゾト云ヘバ、鶉程ナル鳥ノ山ニイクラモ有ヲ、穴ヲ掘テ領々ヲ定メ、我が身ヲ隱シ、音ヲ細クシ
 テ呼ブ術アリ。呼レテ下タルカカヘ押ヘテ取食フ。サテ爲朝空ヲ飛ヲ射落シ、木末ニ有ヲ射トリケリ。鳥ヲ射テ
 後ニ、彼等ニ向テ弓ヲ引ク。當ラジトテヲデワナ、ク。我ニ不隨バ皆射殺シテムト云ケレバ、皆隨候ベキ由申ス。
 衣裳ハ網ノ樣ナル太キ絹也。カ、ル絹ヲ多ク取出シテ爲朝ガ前ニ積置タリ。此嶋ニ名ハ無カト云ヘバ、鬼嶋ト云。
 汝等ハ鬼ニテ有カト云ヘバ、昔ハ鬼也シガ、今ハ末ニ成テ、鬼持ナル隱義隱笠、ウチテノ履、シヅム履ト云物共
 モ今ハ無ケレバ、他國へ渡ル事モセズ、其ニ隨テ、武キ心モ無ト申ス。ゲニモタケ高ク、ツラ長シテ大也。鬼嶋
 トハ不可云トテ、葦ノイクラモ生タリケレバ、葦嶋トコソ申ケレ、八丈嶋ノ脇ノ嶋ニテ、年貢ヲ上ヨト云ケレバ、
 船無シテ、イカニカ年貢ヲアグベキト云ケレバ、二年ニ一度アレヨリ渡テ可納トゾ申ケル。爲朝食事失ヌ前ニト
 テ、彼童一人具シテゾ八丈ガ嶋へ歸ケル。

茂光ハ都へ上テ、保元ノ主ヨリキニテ座ケリ。奏聞シケルハ、爲朝ハ肩愈付テ、矢柄長ク成テ、弓ノ力ハ劣ト云、
 物ヲ通ス事ハ昔ニ同シ。茂光ガ所領七嶋ヲ押領仕リ、一所モ不與、其上昔ヨリ名ダニ聞ヌ嶋ヲ一、鷺ガ渡ヲシル

ベニテ求出シテ候也。其嶋ノ住人等鬼ガマ末ニテ、長ハ一丈餘リニテ皆童也。刀ハ右ノ脇ニサイテ何事モ人ニハ違ヘリ。カ、ル物ヲ隨ル惡黨爲朝ニ多ク付ナバ、日本國ニモ心ヲ懸ベシ。院宣ヲ給テ、カレヲ追討仕ラムトゾ申ス。尤可然トテ、聽而院宣被下。茂光伊豆一國ノ勢ニテ不叶バ、ハケ國ノ勢ニテ責ヨト院宣ヲ被下タリ。先當國ノ弓取渡テ試ベシトテ、伊藤、北條、宇佐美平太、加藤太、加藤次ヲ始トシテ、五百餘人ニテ船百艘ニ乗ツレテ、大嶋ヘコソ渡リケレ。筑紫八郎ノ方人スベキ人モナシ。或ハ親ガ指切ラレテ鳴子共アリ、カキナ折レテ歎クアリ。此人ノ無ラム事ヲゾ悅ケル。彼鬼ノ嶋ノ大童、弓引スベヲ不知、打物仕様モ不知。是モ親有ラム、生土イカニ戀カラム、方人スルニ不及。

折節八郎調伏セラレテ、十三日、病ニ臥タリケルガ、少能成テ、三日ト云ニ、朝敵ノ船ハ寄タリケリ。爲朝程ノ者、最後ノ時思出一モセザルベキカトテ、例ノサキ細ノ矢ニテ、船ノ腹ヲ水ノ底九寸バカリ置テ射タリケレバ、鎧ヲダニモ二重モ三重モ射通ニ、マシテ相船ノ腹爭カタマルベキナレバ、左右ノ腹ヲ射通シテ、海ニゾ矢ハ沈ケル。矢目ヨリ水入テ、舟一艘ハ沈ミケリ。重物ノ具シタル兵ハ底ヘ沈ム、輕キ人ハヲヨギアリク。船ニヨリ熊手ニテ引上、弓ノハズニ取付セテ助ケタリ。昔ハ一矢ニテ鎧武者二人射通ケリ。今ハ舟ヲ射テ多クノ人ヲ殺シケル。是ヲ見テ殘舟共コギモドシテ、矢ノ及バヌ處ニイカリヲウケテ集居テ、支度ヲ構デハ叶マジトシテ、胃腹卷ヲアマタ重テ舟ノ腹ニサグベキカ、楯板ヲ重テ打付ベキカト計處ニ、爲朝是ヲ見渡シテ、敵ハ雲霞ノ勢也、我ハ身一也。縦爰射破タリ共、日本國寄懸バ、戰ヒツカレテ後、云甲斐ナキ嶋ノ奴原ニ打臥セラレテハ口惜カリナントテ、嫡子ノ九ニ成ヲ招タレバ、手本ニツト寄タリケルヲ、頸ヲカキテゾ捨テ、ケル。是ヲ見テ七歳ニ成次郎ト五ニ成女子トヨバ、母ガ押隠シテゾ逃ニケル。家ニ火ヲサイテ腹カキ切テゾ伏ニケル。家ノ焼ヲ見テ、舟共寄テ打入ラ

ムトスレ共、空自害ヤラムヲソロシサニ、一人モ入ザリケリ。既に棟ノ落ケルヲ見テ、加藤次景高ガ申ケルハ、焼タラム預ヲ都ヘ奉ラム事コソ見苦ケレトテ、大長刀クキミジカニ取、シコロヲ傾テ入タリケレバ、自害能シテ死ニ終テタリ。首ヲ都ヘ奉ル。其後鳴々如本ニ茂光ニ隨ケリ。都ニハ爲朝カ首ヲ渡テ、院モ御覽有ケリ。イカナル物ガ讀タリケン、其時ノ歌也ケリ。

源ハタヘハテニキト思シニ千世ノ爲共今日見ツル哉。

昔ハ賴光ハ四天王ヲ仕テ、朝ノ御守ト成リ奉ル。近來ノ八幡太郎ハ奥洲ヘ二度下向シテ、貞任宗任ヲ責落シ、武衡家衡ヲシタガヘテ御守ト成奉ル。今爲朝ハ十三ニテ筑紫ヘ下タルニ、三ケ年ニ鎮西ヲ隨テ、我ト惣追捕使ニ成テ、六年治テ十八歳ニテ都ヘ上リ、官軍ヲ射テ、カキナヲ拔レ、伊豆ノ大嶋ヘ被流テ、カ、ルイカメシキ事共シタリ。廿八ニテ終ニ人手ニ懸ジトテ自害シケル。爲朝ガ上コス源氏ゾナカリケル。保元の亂コソ親ノ頭ヲ切ケル子モ有ケレ、伯父ガ預切甥モアレ、兄ヲ流ス弟モアレ、思ニ身ヲ扱ル女性モアレ、是コソ日本ノ不思議也シ事共ナリ。

とある。この記事は、舊本保元物語や京師本等では、明らかに増補の跡のみえる付加詞章として認められるが、半井本は前の西行の記事に續いてゐて、金刀比羅神社藏本とは甚しい差異がある。さてこの爲朝の鬼嶋渡り最後事は、傳本によりて三種類に分けられることは、「平家物語諸本の研究」(昭和十八年)の附載の研究において示した如くである。

一、舊本保元物語、京師本、阿波文庫藏保元記。

二、蓬左文庫藏本(神宮文庫藏本)、東京教育大學藏(根津文庫本)、京都大學圖書館藏本、杉原本。

三、半井本、康豊本

として三分類をしたのである。第一は、舊本保元物語によれば、爲朝捕はれ流罪の事があって、

はい所伊豆の國大嶋に月日をおくりけるが、嶋の三郎大夫信さだといふ者がむこになりてゐたりける。男子二人女子一人あり。かいなをぬかれたりければ、弓はすこしよわくなりたれども、矢づかは、いま三ふせばかりのびたり。されば物にたつ事日頃には少もおとりたる事なし。嶋うちには有ける弓矢をとりあつめて火にやきすてゝ、我弓ばかりぞありける。此嶋は爲朝が帝王よりたまはりたる所領なりとて、みやけ嶋、八丈嶋、見付の嶋、おきの嶋などいふ嶋をしたがへて……………（中略）

源はたへはてにきと思しに千代の爲朝今日見つるかな

誠に合戦の時爲朝より上にたつ人とこそなかりけれ。

とある。次の第二は、第一と殆ど同文であるが、落首の次が少しく異り、京都大學圖書館藏本によれば、

みなもととはたえはてにきと思ひしに千代のためともいまだありけり、

保元の合戦はふしぎ成し事ぞかし、おちをきる平氏もあり、父をころす源氏もあり、或は子をくれて身をなぐる女もあり、或は主に別て命を捨る郎等もあり。一かたならぬ哀はこのときなりとぞ申ける。

京都大學史學研究室藏本も同文である。

第三は前述の半井本の如き本文である。いづれが前出かといへば、落首の後の異文の上からも半井本を後出と認むべきではなからうか。問題となるのは康豊本である。それは第四種とすべきか、又は第三種として半井本を第四種とすべきか少し疑問が残る所である。その始を示せば、

八郎は又伊豆の大嶋に有けるが、かいな愈つきて、弓を引に障なし。弓の力こそ昔の程はなけれ共、かいな今少長く成てさきぐの矢柄に二伏延にければ、物に立事、昔に少も劣ず、常のことぐさには、哀安からぬ物哉、今度師に討勝て將軍の宣旨をも蒙、國をも數多給らむずる事とこそ思ひしに、果報無の左大臣曰し事に付て、軍に負て朝敵と云れ、流人と成ぬる事口惜さよ、今は此嶋こそ爲朝が所領よとて、大嶋を始として、見上嶋、上津嶋、八丈嶋、見付嶋、奥嶋、新嶋、三倉嶋、已上八の嶋をぞ領しける。

とある。落首までは半井本と内容においては差がないが、最後は、

源は朽はてにきと思へども千代のためとも見るべかりけり、

昔利仁田村の鬼神を攻め、頼光保昌が武略を諍し、唯是往代の舊語、近在の美談也。爰に彼爲朝は力健して虎を取に恐れ無。弓手濃にして、さげ針を射に堪たり。略賢して敵を威すにたやすく、心武して命を顧事を知ざれば、強楚拔山之力、張良が帷帳の中の籌、養由が百當りし藝、紀信が車に載し勇み、一身を以數藝を兼たり。武將の譽に於て誰か肩を並ぶべき。抑下野守ハ父を切弟を切て、愚かに萬歳を期する所、踵を廻らさず、僅に中二年こそ有しか、平治元年十二月九日、信賴卿、謀叛に同意して、主上上皇取籠まいらせ、三條殿を燒拂、大内に桶籠、信西父子を滅し、散々の事共にて終空く亡にき、安藝守ハ又保元平治兩度の合戦に勳功を抽に依て、恩賞尤甚しかりき。位卿相に至り、官大中納言に及しかば、程なく内大臣より太政大臣を極む。子息一族列して、清貫にあり。榮名上古に恥ず。官錄先祖を輝す。一天掌に有て、萬事心の如也き。然而威を振志を恣にせし餘り、治承三年十一月十五日數千騎の軍を起し、太上法皇を鳥羽殿に押籠まいらせ、關白を備前國へ遷し奉り、太政大臣以下四十餘人の官を止、南都を滅し、東大寺を燒き、奇代の狼喉に依て、養和元年閏二月四日熱病躰を責、其身燒る

如して薨にけり。二男宗盛公雖繼家を不肖の器天下を靜るに能ず、餘殃其身に及て花洛を辭して西海に吟するに至て、元暦元年三月廿四日に長門國門司赤馬關にて、或海底に沈み、或は生捕して、一族衰亡にき。依之保元元年より元暦元年に至まで、中廿九年の間、源氏奢を成時は、平氏以是を鎮、平氏奢を成時ハ、源氏を以是を靜む。是を賞し彼弃るに、亂逆連々として天下靜謐せず、君震襟を惱し、臣下藉を安ずる事無。君の不祥は臣の滅亡也。且ハ又崇徳院の憶念の致す所かとも見えたり。倩案するに、君子として無道をば不可行。人臣として正意を存べし。昔も今も國家を危め、君王を惱し奉者は、必ず災を蒙り身を亡と云へり。彼崇徳院は鳥羽法皇の太子、我國の舊主、又當代の御兄弟、叡心の企る所、一旦子細有には似れども、帝運猶傾きがたくて、終に外の塵に遷り給にき。仙洞既如此。況や其餘の後混をや。然則保元以後の先規たる心をさして遠からず、縦賢をみては齊からむ事を思すとも、愚なるを聞ては何惡心を發ざらん。前車の覆は後車の禁る也。心あらむ人として誰か用意を存ぜざらん。

とある。平家物語成立以後の内容を含んで居り、半井本よりも新しい内容を持つが、半井本を基として増補せられたものではない。

半井本の記事は前に掲げたが、半井本に傍線を以て示した如く流布本と類似する語句を含んでゐる。他の諸本にはこの様な語句はなく、流布本は更に詳細な詞章になつてゐるので、最後出と認むべきである。

以上幾つかの本文検討を経て半井本が絶対に金刀比羅神社藏本より前出でないことが了解されたであらうと思ふ。この論考で示したのは僅か二三章の比較検討で、全文比較検討が必要であるが、雑誌論文としては省略せざるを得ない。次に金刀比羅神社藏本と同系統本とのものではどの様に考察せられるかが問題である。これには陽明文庫藏本

や京師本、京都大學文學部藏保元記などを加へて檢すべきである。

講談社刊の新注國文學叢書刊行の際、金刀比羅神社藏本を底本として、學習院大學藏の九條家舊藏本と松井文庫藏の和學講談所舊藏本（京師本）を以て對校した時の比較では、九條家舊藏本や和學講談所藏本（京師本）がやや對抗すべき本文を有し、新舊を判定し難い本文であつたが、陽明文庫藏本になると、卷中、爲義降參事を見るに、

「あづさゆみの」歌の次は、

去程に六人の子共、こゝかしこに有けるが、父の行衛の床しさに山へのぼりつゝ、替給へる色を見まいらせて、各袂をしぼりけり。其中に八郎爲朝申けるは、君の御運のつきぬるに引れてか様に御成候事、力およばざる次第なり。然といへども世間の習、必一准ならず候へば、御心よはく思召べからず、沈は浮理あり。さても此まゝさてはつべきにあらず、我々兄弟の者共あまた候へば、運を天を任、時の至らんを御待候て、御憑もしく思召候へ、入道殿は萬に付ておんびんを存ぜられ、御心をひげして振舞せ給へば、今迄思出一もましまさず、いとやすき受領をだにもゆるされ給ぬぞかし。我等五六人は皆一ばうの大將軍を承べき機用の者共といはれしか。おめくといふ今更降參すべきにあらず、又出家遁世して、乞食沙門の身と成べきにてもなし。さてはいつを限に居候べき。所詮爲朝がはからひ申さんに御付候へかし。是より急東國へ御下向あて、今度の合戦に參向候はぬ三浦介義明、畠山庄司重能、小山田の別當有重などを召寄て仰合られ、中坂東に城郭を構へ…………。

とある。傍線を付した所は金刀比羅神社藏本と異なる所で、詳細になつた所がある。京都大學文學部藏の保元紀（平假名本）も同文である。かうした金刀比羅神社藏本との差異がかなり存在する。しかも京都大學藏の保元紀と類するのである。この点陽明文庫藏本は京都大學藏の保元紀と同類本と認められる。

これらの諸本は金刀比羅神社藏本の如き本文が次第に流動して行く跡を示したものであらう。京都大學史學研究室藏本は、

六人の子どもは父がかはれるありさまをみるに、互に袖をぞしぼりける。鎮西の八郎の申けるは、かうして御渡り候はんよりは、東國へ下向候べし。今度の合戦にまいりあひ候はぬ輩、相模國には三浦介義明、武藏國には畠山庄司重能、弟小山田別當有重、これらをめされ……。（仁和寺藏本も同文）

とあり、金刀比羅神社藏本、陽明文庫藏本、京都大學藏保元記の詞章の一部が脱ちてゐる。かくして金刀比羅神社藏本の如き本文が次第に流動して行く跡を辿ることが出来るのである。永積博士の保元物語の解説において、史實との關係を重要視して、第一類本（半井本）が、記錄的年代的で説話的な傾向を持ち、第四類本（金刀本）が、先例典據の權威をふまへて述懐したり、和歌や古典的文獻を援用したりして、貴族たちの悲運への詠歎を盛りあげてをり、兩本の發想と作品構造とが基本的に異つてゐるを述べて、第一類本が、最初の本文の形式内容を傳へてゐるといふ、この推定は首肯出来ないものである。もしこの説が是認せられるならば、半井本と金刀比羅神社本は全くの別本であつて、同系統としては論ずべきものでないこととなるであらう。それにしても、金刀比羅神社藏本と京都大學研究室藏本と半井本と流布本と、以上四本、四段階の相互間の差異は甚しいものであつて、平安文學などの異本間の差異とは全く類を見ないものである。ここに本文批判の困難が存在するのである。（五〇、一二、一〇）

